
女子剣道部ですが、何か？

みかんだいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子剣道部ですが、何か？

【Nコード】

N70120

【作者名】

みかんだいふく

【あらすじ】

あるところに、私立美浜中学校という学校がありました。部活動があまり盛んではなく、入部率も全国で最低レベルを記録しています。

女子剣道部なんてあるはずもなかったのですが……四人の剣士が集まり、団結し、道を切り開いていくのです。

元気っ子に剣道馬鹿、お嬢様に天然少女。

彼女たちは、剣道を通して、何か変わっていくのでしょうか……？

剣道についての用語などについては解説を入れていきますので、
剣道を知らない方でも楽しんでいただけたらと思います。

登場人物紹介&剣道用語解説（前書き）

は女性キャラ、 は男性キャラです。

人物紹介&用語解説は、随時更新いたします。

登場人物紹介&剣道用語解説

〈女子剣道部メンバー〉

渡瀬 わたせ 伊織 いおり 剣道初段&剣道部部长。しっかり者なみんなのリーダーで、剣道が大好き。父親は有名な剣道家だったが、癌で他界。母親と二人で暮らしている。一人称は私。

辻 つじ 綾音 あやね 元気で明るいちびっこ。すばしっこく、運動神経も良い。伊織とは、小学生の頃からずっと仲良し。低すぎるその身長には、他人にいけない秘密が潜んでいる。一人称はあたし。

赤石 あかいし 雛乃 ひなの 天然、電波系少女。薙刀経験者で、その腕前は結構なものだったが、あることをきっかけに薙刀をやめてしまう。一人称はヒナ。

西澤 にしざわ 麗 れい 超有名財閥の一人娘、生粋のお嬢様。その家柄故に、寂しい幼少期を送ってきたらしい。運動神経、体力ともに人並み。執事の名前は桜庭 さくらば。一人称は私 わたくし。

名前：魅麻 みあさ 皐 さつき 美浜中剣道部メンバーで唯一の二年生。目つきが鋭く、性格は短気。だが、ツンデレだったり案外可愛い面も。話し方は時々武士チックになる。一人称は某 それがし。

〈その他の登場人物〉

来須 くるす 香織 かおり 女子剣道部顧問。高校時代は玉竜旗で十五人抜きを果たしたほどの実力者だが、現在、顧問としての仕事は部長の伊

織に任せっぱなし。時々、顧問らしい一面を見せる。

渡瀬 逸巳 伊織の父親で、故人。有名な剣道家であり、伊織に剣道を教えた張本人。

桜庭 麗の執事。剣道はもちろん、さまざまな武術に優れている。

志紀 修命館の師範。逸見とは学生時代の良きライバル。

〈剣道用語の解説〉

・団体戦 だんたいせん その名の通り、複数人で行う試合。三人、または五人で行うことが多い。

・個人戦 こじんせん その名の通り、個人で行う試合。

・玉竜旗 たまりゅうき 高校生の剣道の大会。大規模（全国レベル）。高校生の大会としては珍しく、勝ち抜きの試合となっている。

・先鋒 せんぽう 五人戦、三人戦ともに一番最初のポジション。チームの流れを作る重要なポジション。

・次鋒 じほう 五人戦の際、二番目のポジション。四人以下の場合、最初に外される。

・中堅 ちゅうけん 五人戦、三人戦ともに中間のポジション。前半の悪い流れを断ち切るなど、重要な役目もある。

・副将 ふくしょう 五人戦の際、四番目のポジション。三人以下の場合、外

される。

・大将^{たいしょう} 五人戦、三人戦ともに最後のポジション。もっとも重要
且つ、強い人間があたる可能性が高い。

・修命館^{しゅめいかん} このお話オリジナルの道場名。伊織が通っている道場
で、その強さははかり知れないといわれている。

登場人物紹介&剣道用語解説（後書き）

お話の中で分かりづらい用語や、何これ？
という用語などがござ
いましたら、感想等でお知らせください。
気づき次第、用語解説で説明いたします！

第一話 剣道、やってみようよ！

伊織 side

私立美浜中学校……文武の『文』に力を入れた学校であり、『武』の部分には滅法弱い。

部活動の入部率は三十パーセントにも満たない……しかしその分、学力は県内トップを誇っている。

「剣道がしたい……」

「まーた伊織はそれ？」

「だって最近、修命館しゅめいかんにも行けてないんだもん」

「シュウマイはいって」

「しゅうめい！」

私の名前は、渡瀬わたせ 伊織いおり。

美浜中学の一年生……剣道欠乏症を患っている。

修命館っていうのは、私が通ってる剣道の町道場。

「大体、剣道なんて女の子らしくないじゃん！」

隣にいるのは、辻綾音。

背が低くて無駄にパワフルな、いわゆる元気っこ。

「そんなことない。剣道は楽しいし、礼儀も身につくよ？ 綾音もやろっよ！」

「やろっもなにも、剣道部がないんじゃ意味ないじゃん」

ふふ、そういうと思ったの。

「実は、あつたんだよ。美浜中にも剣道部が」

「嘘っ」

「ホント！ 今は部員もいないけど……部員が三人以上集まったら、武道場使って良いって言われたの。だから、やろ？」

「うん……」

私がここまでして綾音を誘うのには理由がある。

綾音は運動神経がよくて、すばしっこい。

それは、剣道をやるにあたって、大きな武器になるの。

「じゃあ、部員候補がもう一人集まったら、あたしも考えてあげる
！」

「わかった……約束だからね？」

初めから、もう一人は探すつもりだったし……これで一歩前進。

次は二人目……天然な、あの子をたずねなきゃ。

第二話　ねぎ、違った薙刀経験者です　　雛乃side

ヒナは困ってます。

それは、入学して既に二週間も経っている学校で、迷子になったから……。

「確か、こっちははずだったのにな？」

校内の見取り図は、入学式の日にしっかり頭に入れたはずなのに。

ヒナが困っていると、突然、誰かが声をかけてきた。

「赤石　雛乃ちゃん？」
あかいし　ひなの

「はう！？　どうしてヒナの名前を……もしかして、『あくのそしき』ですか！？」

「あ、悪の組織？」

「違うですか？」

「私は渡瀬　伊織。雛乃ちゃんを探してたの」

伊織さん……どうやら、怪しい人ではなさそうです。

あくのそしきとは無関係みたいですな。

「雛乃ちゃん、薙刀なぎなたやってたんでしょ？」

「はい。でも、中学に入ると同時にやめちゃったですよ？」

「それでもいいよ。それでね、剣道やってみる気はない？」

剣道？ 確かに、薙刀と剣道の試合はごく稀にあったりするけど……。

「私ね、剣道部を作りたいの。それで、薙刀経験者の雛乃ちゃんには是非、入部してほしいなって」

「剣道部ですか……。あの、ヒナはねぎ、じゃなくて薙刀をやっただけで……。剣道なんて、できないですよ？」

「大丈夫。薙刀から剣道に転向する人もたまにいますし、ね？」

まあ、特に入りたい部活もなかったし、いいんだけど……。

「わかりました。楽しそうだし、入部したいです」

伊織さんの顔が、一気に明るくなる。

「……でも、一つだけいいですか？」

「何？」

「ここ、どこですか……？」

こうして、ヒナは剣道部に入部することがきまったのです。

薙刀をやっていたおかげで、こうして剣道部に入れたって考えたら……。

ヒナは、薙刀にすごく感謝しています。

第三話 あたしも入部するからね！

綾音 side

伊織が「剣道をしたい」って言うのは、いつものことだった。

だけど、今回はちょっと違うみたい。

「剣道をしたい」と、「剣道部を作り（復活させ）たい」っていうのは別物だもん！

昨日、剣道部に勧誘されたときはOKできなかったけど……。

体を動かすことは好きだし、伊織が作った剣道部なら、入部してもいいかなっ。

もう一人、入部希望者がみつかったら、その時は入部届、取りに行こう！

そんな風に考えていた時だった。

「綾音！ 二人目ゲットだよー！」

伊織が、突然飛びついてきた。

普段の伊織なら、なかなかこんなことはしない。

「ポケモソ、ゲットだぜって感じ？」

「ンじゃなくて、ソだもんね……それはともかく、私を含めて二人の入部は決定したわけなんだけど、綾音はどうするの？」

そうだ、入部の話しようと思ってたんだ！

「あたし、入部したい！」

「ほんと！？ それじゃ、すぐ部活設立の手続きするから」

「うん。入部届け、貰ってきてね」

そういつて、伊織が職員室に走り出そうとしたときだった。

「お待ちください！」

誰か……女の子に、呼び止められた。

「あの、私を剣道部に入部させていただけないでしょうか？」

パツと見た印象は……お嬢様。その一言に尽きる！

「えっと……あなたは、誰？」

伊織が、驚きながらも尋ねる。

「申し遅れました。私、西澤麗と申します」

それが、四人目の剣士……所謂、お嬢様との出会いだった。

第四話 制服がシルク生地って、どういうこと？

伊織 side

綾音が入部するって言うてくれて、やっと三人そろったあ！ って
浮かれていた時だった。

突然、見知らぬ女の子に声をかけられたの。

正真正銘、どこからどう見てもお嬢様……それは、彼女の言動から
も明らかだった。それに……。

制服がシルク生地って、どういうこと？

何はともあれ、自己紹介。

向こうが名乗ってきたんだから、こっちが名乗らないわけにはい
かないよね。

「西澤さん？ 私は、渡瀬 伊織」

「存じ上げていますわ」

「あ、あたしは辻 綾音！」

「貴女も、剣道部の方ですか？」

「まあ、そういうことかなっ」

で、本題なんだけど……。

「西澤さん、剣道部に入部してくれるの？」

「ええ。ぜひ入部したいと思っていますの」

「私としては、大歓迎なんだけど……でも、どうして？」

「……桜庭さくらばに、近づきたいんですの」

「さ、さくらば？」

桜庭つて、何？

「桜庭は、私の執事ですの。剣術や武術も嗜んでいて、私を守ってくれるのですが……」

「桜庭さんみたいになりたいの？」

「いえ。そういうわけではないのです……。桜庭は、強い女性が好みだと言っていたんです。それなら、少しでもそんな風になればらと……」

頬を染める西澤さん。そっか、恋してるんだ。

「それなら、大歓迎！一緒に頑張ろ？」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ私、入部の手続きとかしてくるね！」

女子剣道部の顧問は、来須^{くるす} 香織^{かおり}先生になった。

来須先生は、高校時代に玉竜旗で十五人抜きをしたほどの実力者。

だけど、高校を卒業してからは剣道をやめちゃったみたい。惜しいなあ……。

「まあ、引率とかはするけど……剣道部のことは、あなたに任せるわね」

その上、なんか適当だし……。

でもまあ、いいか。

部員が四人集まって、剣道部ができて……。

これから、私たちの物語が始まるんだよね！

第五話 これは命令ですわよ 麗side

「良かった。認めてもらえましたわ……」

剣道部の部長……渡瀬さんに入部を認めてもらえて一安心です。

でも……まだ、問題があるのですわ。

「桜庭、少しいいかしら？」

そう……執事の、桜庭の説得。

渡瀬さんや、辻さんに詳細を説明するのは簡単でしたわ。

私の、桜庭への思いを伝えればよかったのですから……だけど、桜庭への説明はそういきませんわね。

桜庭に、私の気持ちを悟られるわけにはいかないのですから。

「私、剣道部に入部しますわ」

「お、お嬢様？ 聞き間違いでしょうか。剣道部と……」

「ええ。剣道部と言ったわ」

私の言葉に、やはり動揺する桜庭。

「しかし、剣道など……」

「私、同じことを二度言うのは嫌いですの」

「……理由は、どういったものなのですか？」

理由……それが、一番困る質問ですわ。

「護身用に身につけておくのも悪くないと思ったからですわ。それに……」

「それに、なんですか？」

「何か、夢中になれるものが欲しいんですの」

この理由は、本当のことですわ。

今まで、夢中で何かに取り組むなんてなかったのですから。

「それなら、剣道でなくても……もっと、安全なものがあるのでは……」

「……桜庭。これは命令ですわよ」

「……かしこまりました。麗お嬢様」

少し、無理矢理だったかしら？

執事である桜庭にとって、主である私の命令は絶対ですわ。

桜庭が、私のことを心配してくれているということは分かるのですが……こうでないと、桜庭は折れてくれませんわ。

……何はともあれ、私は正式に剣道部に入部できることとなったのですわ。

第六話 どんな時でも、明るく楽しく！

伊織 side

「じゃあ、看板かけるね？　せーのっ」

今日から、剣道部が正式にスタート！

というわけで、剣道部にあてられた部室（部室棟は空き部屋ばかりだった）を整頓して、明日から部活に打ち込めるようにしようと思ったの。

その作業の一つ目が、剣道部の看板をかけること……。

「これだけで、ああ。剣道部なんだあって思うね！」

「そうですねえ。中に入ってみませんかあ？」

雛乃ちゃんの言葉で、四人が中に入った。んだけど……。

「ほ、ほこりっばい！」

「コホ、コホ……す、すごいお部屋ですわね」

床を踏みしめるたびに舞い上がるほこり。

雑多にものが詰め込まれたロッカー。壁にかかった時計も、壊れているのか動いていない。

確かに、ひどい部屋……。

「……このお部屋、素敵ですねえ」

「は!?!」

雛乃ちゃんの言葉に、全員が驚く。

「だって、部室棟のほとんどのお部屋は日光が当たらないんですよ? それなのに、このお部屋はポカポカして気持ちいいですよ」

そういえば、電気もつけていないのにこの部屋、明るい……。

「……ちゃんと掃除したら、きっといい部屋になるよね」

「まあ、なんてったって剣道部の部室だし! どうせ汗臭くなるんだから、多少はいいよね!」

「今日と明日で、掃除をいたしませんこと?」

「そうだね。これだと、一日で綺麗にするのはキツイもん」

どんな時でも、明るく楽しく！

私たち剣道部に、ピッタリの言葉だな……って思う。

前向きに頑張っていこう。そうすればきっと、前に進める。

「じゃあ、とりあえず……」

「『剣道部設立、おめでとう』（うゝ・ですわ）！」「」「」

美浜中学校剣道部、本日よりスタートです！

第七話 その角度、ピッタリ三十度 綾音 side

剣道部の初めての活動は、部室の掃除だった。

「ヒナ、雑巾洗ってきますう〜」

「ありがと！ これもお願いしていい？」

「うわっ、カーテンがカビてる！」

結構、大変なことになってるよね。

窓とドアを全開にしてるし、換気はちゃんとしてるんだけど……やっぱり大分ほこりっぽい。

みんなで悪戦苦闘していると、開きっぱなしのドアから突然誰かが飛び込んできた。

「お、お嬢様！」

スラリと背の高い、清潔感溢れる男の人だ。

美浜中学の先生じゃない。もちろん高校の方の先生でもないだろうな。

だって……執事服を着てるんだもん。

「紹介しますわ。私の執事、桜庭です」

スツとお辞儀をする桜庭さん。その角度、ピッタリ三十度。

「桜庭といいます。以後、お見知りおきを」

「……ところで桜庭。どうしてここにいいのかしら？」

麗に聞かれて、桜庭さんは少し焦ったような顔をする。

「そ、それは……お嬢様が、このような、掃除などということをして……」

お嬢様の麗が掃除をするのを、桜庭さんはよく思っていないのかな？

「お黙りなさい！ 私は、剣道部に入部したんですのよ？ 郷に入

つては郷に従え……所属する部活動である剣道部のしきたりや活動に従えないようでは、西澤家の名が廃りますわ」

ご、ごうにはいつては？ しきたり？ ながすたる？

ぜ、全然意味が分からない……。

「……申し訳ございませんでした」

え？ 桜庭さんは、意味分かったの？

「分かればよろしいんですよ」

「皆様にも、失礼なことを……お詫びと云ってはなんですが、掃除のほうを手伝わせてはいただけないでしょうか？」

手伝い？

「え、いいんですか？」

「是非、やらせていただきたいのです」

「それじゃあ、お願いしますー！」

四人でやるより、五人で頑張ったほうが早く終わるもんね！

桜庭さんの協力もあってか、それから掃除は順調に進んでいった。

二日はかかるかな？　と思われてたけど、今日だけで何とか終わらせることができた。

「桜庭さん、ありがとうございました！」

「いえ……私は、ただお詫びができればと」

「それにしても、桜庭さんってすごいですねえ」

雛乃の意見に私も同意。桜庭さんの手際のよさは、真似できるもんじゃなかったもん！

「ヒナはみんなとだけじゃなくて、桜庭さんともお友達になりたいです」

「お、お友達ですか？ 私が？」

「いいじゃないですか！ みんな友達ですよ！」

「そうですわ桜庭。皆様のお言葉に甘えてしまいなさい」

「で、ではお言葉に甘えて……友達、ですか」

「友達は、下の名前で呼び合つんですよ。だからヒナもこれから、みんなのこと下の名前で呼びますわ」

「それ、いいね」

「私もそういたしますわ」

「決まりだね！ じゃあ皆、改めてこれからよろしく！」

部室の掃除が終わって、明日からは本格的に部活動が始まるよ！
楽しみだな。

第八話 床に叩き付けちゃ駄目！ 伊織side

「そのまま大きく振り下ろす！ そうそう……って綾音、床に叩き付けちゃ駄目！」

現在、素振りの練習中……。

素振りっていうのは、野球やテニスの素振りと同じ感じ。竹刀を上
に振りかぶって下に振り下ろす動作のこと。

「やっぱり雛乃ちゃんは上手だね……って、麗ちゃん！？」

麗ちゃんは、素振りどころか竹刀の重さに遊ばれてる感じ。

「大丈夫？ もう少し軽い竹刀使う？」

「いいえ。大丈夫ですわ……」

それでも頑張っている麗ちゃん。偉いなあ……。

「ちょ、綾音ストップ！ 床が、床が割れるー！」

そんなこんなで、本日の練習は終了。

朝にも練習したいというみんなの要望もあつたので、朝は筋トレ、夕方は素振りをする事になった。

まだしばらくは防具もつけられないし、とりあえずはそんな感じかな。

「じゃあ、今日は解散!」

「「「ありがとうございます!」」」

久しぶりに素振りしたら、剣道がしなくなっちゃったな……。

修命館の練習に、参加しようと。

「お久しぶりです!」

「おお伊織。久しぶりだな」

「中学に入ってから、忙しくて……」

「ああ、噂は耳にしてるぞ。剣道部をつくったそうだな」

修命館の師範、志紀^{しき}先生が目を細める。

「逸見^{いつみ}も、喜んでいるだろうな」

「……そう、ですかね」

逸見……っていうのは、私のお父さん。

「逸見が生きていたら、強くなった伊織を見てさぞかし喜ぶだろう……最期まで、剣道を心から消さなかった男だ」

「……」

お父さんは……私が小さい頃に、病気で死んでしまった。

あまり記憶はないけど……お父さんと交わした最後の約束。

「剣道、頑張って続けるんだぞ」……。

それを私は今も、守り続けている。

剣道が大好きだし……私が剣道を続けている限り、お父さんが私の

中から消えることもないから。

「さあ、練習を始めようか」

「はいっ！」

いつか、私は剣道をやめるかもしれない。

お父さんとの約束を、忘れてしまいかもしれない。

だけど……剣道の楽しさだけは、忘れないでいたい。

第九話 腹筋の最高記録五？

難乃 side

昨日は、初めて竹刀を振りました。

薙刀をやっていたときは、剣道の練習を遠くから眺めたこともあるけど……実際に竹刀に触れたことはなかったんですう。

朝練は午前七時から七時半までの半時間、第三体育館を使って行うことに決まったらしいです。

「今日は、何をするんですかあ〜？」

「今日は……っていうか、朝練は筋トレにしようかなって。とりあえず、基礎体力つけとかなきゃいけないしね」

「そうなんだ！ 何をしたらいいの？」

体育が得意な綾音さんは、楽しみな様子ですう。

「じゃあ、とりあえず試しに腹筋二十回！」

伊織さんの言葉に、みんなが腹筋を始めた……んですが……。

「ふう、終わった！」

「私も終わりましたわ。案外疲れるものですね」

「雛乃ちゃん、あと何回……って、大丈夫!？」

「だ、だいじょーぶじゃないですう……」

おながが……体が、持ち上がりません！

腹筋って、こんなに大変なことだったんですかあ？

「雛乃ちゃん、腹筋の最高記録五?、と」

その後にも、腕立て伏せや空気いすをやったんですが……。

全然、みんなに追いつけないですう……しゅん。

「雛乃ちゃん、焦らなくていいよ?」

「そうそう！ あたしだって苦手なものってあるしね!」

「得手、不得手があって当然ですわ。雛乃さんは雛乃さんらしくいればよろしくてよ」

落ち込んでいるヒナに、みんなはこんなに優しい声をかけてくれたんです！

「ありがとうございます！」

やっぱり、友達はいいものです……。

今日は、剣道部のみんなのことを、昨日までよりもっと大好きになれました。

第十話 いや、こっちのセリフなんだけど

伊織 side

今日の朝練は、グラウンドでランニング。

やっぱり、体力や持久力もつけなきゃいけないしね（特に雛乃ちゃん）。

走りながら、綾音が叫ぶ。

「あと三周だよー！」

「さすが綾音さん、体力がありますわね……」

確かに……雛乃ちゃんなんて、もうフラフラになってるのに、綾音はまだまだ元気そうだ。

「だって、あたしから体力取ったら何が残るのって話じゃん！」

「それ、自分で言っちゃダメでしょ……ん？」

なんか、視線を感じる……？

「綾音、今何か感じなかった？」

「え？ 別に、何も」

……気のせい、かな。

そして、夕練。

「みんな、大分うまくなってるな」

もともと素質があるのか、飲み込みも早くて驚くほど上達している。

これなら、結構早く防具つけられるかも……ん？

「伊織さん、何か視線を感じませんかあ？」

やっぱり？

「私も思いましたわ。おそらく、窓の外からですの」

体育館を出て、少し歩いたところに……いた。

茂みに隠れて中の様子をのぞいてて、明らかに怪しい。

「どちら様ですか……？」

「ひ、ひゃあ！！ お、お前は誰だ！！」

怪しい人……制服のリボンの色から、二年生であることがわかった……が叫ぶ。

いや、こっちのセリフなんだけど。

「私は、剣道部部長の渡瀬伊織です。剣道部に、何か御用ですか？」

とりあえず、作り笑顔はバツチリ決めておく。

「ぶ、部長っ！？ まさか、こんなところで出くわしてしまうとはっ！ いや、これは逆にいえばちゃんすではないか……いやしかし！」

？　なんかこの人、変……？　いや、わかりきってたことだけだ。

「某^{それがし}は、魅^み麻^あ 皐^{さつき}。剣道部に入部したいと思い、参上つかまつた」

それがし……さんじょう……？

「み、魅麻さん、ですか？」

「いや、できれば皐と呼んでいただきたい」

「さ、皐さん」

「はいっ！　真面目系少女にしたの名前で呼ばれるの、夢だったの
く！」

え……なんか、キャラ違う！？

「あ……ごめんねっ！　私、俗にいうツンデレってやつで……ツンの部分は武士っぽいの！　てへっ」

はあ……今はデレの部分と。

ツンデレっていうより、二重人格じゃ……。

……
……とりあえず、わが剣道部にまた一人、部員^{へんじん}が増えたのでした。
……。

第十一話 武士っていうより殿様って感じかも

綾音 side

「というわけで、今日から剣道部の一員になられた魅麻皐先輩です」

伊織が、みんな（といっても三人しかいないけど）の前で、隣にいる女の人（子？）を紹介している。

先輩……ってことは二年生だね？ あたしより背が低いんだけど。

「えっと、魅麻皐ですっ！ 二年生で、みんなよりもちょっと年上だけど、気にしないで皐って呼んでねっ」

なんか、すごいキャピキャピしてる感じの人だな……。

「ちなみにこれは、ツンデレのデレの部分ですっ！ ツンの部分はまた出てくると思うので、ちょあゝと待っててね」

ツンデレって、漫画とかでよく見るあれだね？

普段はツンツンしてるけど、好きな人の前ではデレっとしちゃうって……。

この人が、それ？ そんな風には見えないけどな。

「ツンの部分は、武士っぽくなるそうです。さあ、練習再開しようか」

伊織が、何事もなかったかのように練習を再開する……けど、武士って！？

その言葉の意味は、すぐにわかった。

竹刀を手にした途端、臯先輩の目の色が変わって、口調もよくわからないものになった。

「ふむ。この竹光^{たけみつ}は、ちと軽い……ささくれだっておったようだな」

竹光？　ちとって……。

「あ、そうなんです。ささくれた竹刀も削って何度でも使ってます」

「竹がダメになっても、組み替えてまた使っんですぅ」

「リサイクルとはまさにこのことですわ」

なるほど、竹光って竹刀のことだったんだ。

「よき心がけだな。幾度も繰り返し使うことで、竹本来の強さを引き出す……すばらしきことではないか」

はっはっは……と高笑いする梶先輩は、武士っていうより殿様って感じかも。

「振り心地も良いな。手入れが行き届いている証拠だ」

だけど、梶先輩の素振りはとても綺麗で、初めて竹刀を振った感じは一切なかった。

もしかしたら、剣道やったことがあるのかな？

第十一話 武士っていうより殿様って感じかも

綾音 s i d e (後書き)

竹光っていうのは、竹刀の古い言い方です^^

第十二話 少し頬が緩んでしまいましたわ

麗 side

皐さんが剣道部に入部してから二週間が経ち、私たちはようやく防具をつけられることになりましたの。

「みんな随分上達早いし、そろそろ防具つけはじめないと他校と差が開くから」

と、伊織さんはおっしゃっていて……やはり、褒められるのは嬉しいことですね。

「で、後ろでリボン結びをして完成！ みんなできた？」

今は伊織さんに面のつけ方を教えてもらっている最中ですわ。

袴の着方は、他の着物と大差がないので簡単だったんですが……面のつけ方は少し難しいですわ。

屋敷に帰ったら、桜庭と復習しなければ……。

「お嬢様、本日はどのような練習をされたのですか？」

「今日は、初めて防具をつけたわ。桜庭、夕食の後に復習をしたいのだけど、付き合ってくれるわよね？」

「もちろんでございます」

ようやく面のつけ方を覚えることができた頃、桜庭が言い出しましたわ。

「私も、久しぶりに竹刀を振るってみたいだろうか……」

「それなら、部活に参加してみたらどう？」

「私のようなものが……よろしいのですか？」

「皆様も喜ばれるはずよ」

伊織さんたちは、桜庭のことを何一つおかしいと思っていないですわ。

きつと、歓迎してくださることでしょう……。

桜庭と共に学校へ行けると考えると、少し頬が緩んでしまいました

た
わ。

第十三話 青春って感じですねえ

雛乃side

防具のつけ方を教わった次の日、桜庭さんが部活にやってきました。

「はじめまして、麗お嬢様のお付きの桜庭です」

臯先輩に挨拶する桜庭さん……お辞儀の角度、きれいですう。

「本日は、皆様の部活に参加させていただけるということ……」

「かたい挨拶はいいから、さっさと始めましょう!」

「そうですよ。じゃあ、桜庭さんはこっちで……」

伊織さんが慣れた様子で桜庭さんに対応してますう。さすがですねえ。

「桜庭殿の教え方は、理にかなっていて解り易い……いやはや、流石であるな」

梶先輩が感心してるのもわかります。桜庭さんは強いうえに教え方も上手で……とにかく、すごいですう！

「当然でしょう。うちの桜庭ですもの」

麗さん、嬉しそうです。恋してるって感じですね……。

「確かに、桜庭さんってすごいよね！ 顧問の先生なんていらなんじゃ……」

綾音さんが、言葉をとめました。

なんていうか……黒いオーラが背後からしたんです。

「せ、先生っ!？」

女子剣道部顧問、来須香織先生……タイミング、悪いです。

「そうよね。私みたいな役立たず顧問、必要ないわよね……」

な、なんかブラックモードですか!？ 暗い……暗いですう！

「そ、そんなことないです！ 先生は必要ですよ！」

「あなたがいるから、この部活が成り立っているんですもの」

「うっん……こんな幽霊顧問、必要なのよね。過去の栄光にすが
つてだけの、こんな私なんて……」

ねがていぶしんきんぐ、ですか？ ついていけないですう……。

「あの、顧問の先生でいらっしゃいますか？」

混乱した場をつくろうように、桜庭さんが言います。

「はい。どうせ役立たずですけど……」

「いえ、そのようなことはありません。あなたは立派な先生であると、誰もが認めています。そうですね？ 麗お嬢様」

確認するように、麗さんに問いかける桜庭さん……無言でうなずいた麗さんは、桜庭さんの言葉に続きますう。

「ええ……なんでも、来須先生はあの玉竜旗にも出場したことがあ

るとか……それで、今剣道をしていらっしやらない理由はわかりませんけど」

へえ……玉竜旗の大会ですかあ……。

「……私、顧問失格じゃない？」

「失格なんかじゃないですよ。でも、これからは部活に顔出して下さいね？」

伊織さんの言葉に、先生の顔がぱあっと明るくなります……青春
って感じですねえ。

……なにはともあれ、顧問の先生と桜庭さんを含めた女子剣道部
が発足されたのでしたあ。

第十四話 なんか、照れるな 綾音 side

「試合よーー！」

あれから、来須先生は部活にちゃんと来てくれるようになった！

桜庭さんもたまに来てくれるし（麗の勧めかな？）、練習はどんどん活性化してる。

そんなある日、来須先生が言い出した……試合？

「夏季剣道大会が七月にあるんだけど、もうエントリーしておいたから」

「テヘッ」 という感じで言う来須先生。

「大会って……私たち、まだ初心者ですわよ？」

麗の言う通り、あたしたち……っていうか伊織以外の四人はまだまだ初心者。

試合なんて、早すぎるんじゃない？

「某もそう思うで候……初陣にはまだほど遠いかと」

初陣っていうのは、初めて出陣する戦のことらしい……なんか、通訳になった気分。

「そんなことないわよ。夏までには時間がたつぷりあるし、みんなよく頑張っているしね」

「確かに、最近のみんなの上達ぶりはすごいですよね」

伊織が、先生の言葉にうなづく。

「そうそう。大丈夫、あなたたちは既に初心者とは言えないくらい強くなってる……まあ、もとの素質が大きかったんでしょうね」

素質……誉められてるんだよね？　なんか、照れるな。

「というわけで、夏季剣道大会に向けて頑張るぞー！」

「「「「「おー！」「」「」「」」」」

あたしたちに、試合という目標ができた。

ダメモトかもしれないけど……頑張ってみよう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012o/>

女子剣道部ですが、何か？

2011年5月9日12時57分発行